

## 海外紹介

## 国際会議報告

## リスボンにおける2005年世界鍼灸学会連合会国際鍼灸シンポジウム報告

全日本鍼灸学会国際部

津嘉山 洋、内田 輝和

## 要 旨



世界鍼灸学会連合会 (World Federation of Acupuncture-Moxibustion Societies: WFAS) の2005年度国際鍼灸シンポジウムが2005年11月4日(金)から6日(日)までポルトガル、リスボンのシェラトン・リスボアホテルにおいて開催された。ポルトガル電気鍼学会 (Associação Portuguesa de Acupunctura Eléctrica: APAE) が「鍼: 21世紀医学のための新しい方法」というテーマで運営を行った。日本人の土屋光春氏が大会会長を務めた。312人の参加者が23か国から集まった(ポルトガル86名、日本68名、中国35名など)。今回のシンポジウムは日本鍼灸(研究)の欧州への紹介を意図し、日本の鍼灸研究を60枚以上のポスターで伝えるJapan Special Poster Sessionが全日本鍼灸学会の協力の下に企画された。

11月5日の午後に執行理事会が行われ、昨年のゴールドコースト大会で決まったばかりの顧問委員会の替わりに専門家委員会を設立することが決定された。また、標準化委員会と外交委員会の設立についても了承された。

キーワード: 鍼灸、WFAS、ポルトガル、執行理事会、日本

## はじめに - 日本鍼灸の再発見

世界鍼灸学会連合会 (World Federation of Acupuncture-Moxibustion Societies: WFAS) の2005年度国際鍼灸シンポジウムが「鍼: 21世紀医学のための新しい方法」(Acupuncture: New Ways for the 21st Century Medicine) というテーマで、2005年11月4日(金)から6日(日)までポルトガル、リスボンのシェラトン・リスボアホテルにおいて開催された。運営の主体はポルトガル電気鍼学会 (Associação Portuguesa de Acupunctura Eléctrica: APAE) で、APAE副会長・土屋光春(以下敬称略)が大会会長を務めた。

エンリケ航海王子 (Henrique o Navegador、

1394-1460) に始まる大航海時代にポルトガル人は香料を求めアジアに進出した。テージョ川岸にある「発見のモニュメント」前の大理石敷の広場には世界地図が描かれ、ポルトガル人が各地に到達し彼らによって世界が「発見」された年がそこには記録されている。この地図によるとポルトガル人によって1541年(歴史上は1543年)に日本が西洋に「発見」された。その後、鍼灸は出島を通じて欧州に伝えられた訳であるが、19世紀欧州における鍼の衰退や、1970年代以降の国家的事業としての中医学の宣伝にかき消されるように、日本鍼灸は欧州において忘れられていた。ヨーロッパ諸国の中で日本と最も古くから直接交流のあつ

た国であるポルトガルにおいて、日本人を会長として実施された今回のシンポジウムの実質的なテーマは、「欧州による日本鍼灸の再発見」であるといつてよいだろう。

本稿は、まずシンポジウムの概要などについて、ついで会期中に行われた執理事務会について報告する。

## 1. 概要

まず開会にあたり、オープニングセレモニーが4日の午前9時から始まった。土屋光春による歓迎の挨拶が行われた後、WFAS 会長・鄧良月 (DENG Liangyue)、WHO 伝統医学コーディネーター・張小瑞 (ZHANG Xiaorui)、APAE 会長・ALMEIDA João Paulo Pereira の挨拶があり、コーヒーブレイクを挟んで日本と中国それぞれのポルトガル大使館、ポルトガル保健省の代表者の挨拶が続いた。その後日本の支援団体を代表して、全日本鍼灸学会 (The Japan Society of Acupuncture and Moxibustion: JSAM) 会長・矢野忠、日本柔道整復師会会長・萩原正の挨拶があった。海外で開催される WFAS の学術集会のセレモニーに中国の本国政府関係者と中国大使館関係者がスピーチを行うのは中国人以外にとっては不思議なことだが恒例といつてよく、WFAS における中国の覇権の象徴の一つであった。日本の政府関係者や学会関係者が挨拶を求められるのは異例なことであり、今回のシンポジウムの特徴を象徴している。



写真1 JSAM 会長・矢野忠  
(2005.11.4, Lisbon)

参加者総数は312名で、欧州13か国から168名が、アジア・オセアニア6か国から129名、米州4か国から17名の参加があった。国別ではポルトガル86名、日本68名、中国35名、イタリアと韓国14名、カナダ

11名が目立ったが、欧州の参加者が比較的多くイタリア以外にもスウェーデン、フィンランド、オランダ、ドイツ、スペイン、スイス、フランス、ノルウェー、ベルギーからそれぞれ5名以上の参加があったことが特徴であった。

欧州からの参加者は、欧米の医学雑誌を舞台に派手な活動をしている補完代替医学の代表的な研究者たちとは別のグループに所属している鍼灸関係者たちのものであった。学術的に名を知られている鍼研究者たちは、International Council of Medical Acupuncture and Related Techniques (ICMART: 国際医学鍼灸関連療法協会) の方に分布しているようで、WFAS には一定の距離を保っているようである。一方で、WFAS の西欧勢力は、多少の違和感を抱きながらも宗主国である中国に対して異議を唱え運営の健全化を求めることに遠慮がちである。学術的な水準の高さを求めるのであれば、大韓韓医学会 (Korean Oriental Medical Society: KOMS) が試みているように、ICMART との連携を図るべきかもしれない。

学術プログラムはBall Room 1から4の4会場に分かれて行われた。Ball Room 1ではビデオ・セッションや実技のワークショップが行われた。ポスターはBall Room 前のホールに掲示された。今回のプログラムを見て、誰もが思うことは日本からの発表が多かったということである。基調講演6題のうち3題 (内田輝和、栗林恒一、若山育郎: 五十音順)、招待講演6題のうち5題 (形井秀一、川喜田健司、木村通郎、鈴木俊明、渡辺裕) が、口演発表49題のうち4題が、ポスター発表26題中11題が、8つのworkshopのうち5つが日本人研究者によるものであった。総計95のプログラムのうち30が日本 (系) 人の発表という少々極端な状況となっており、地元ポルトガルからの19題、中国の10題をはるかに上回っていた。

大会会長の土屋は数年前から日本の鍼灸関係者に本シンポジウムへの協力を依頼し、JSAMも公式にこの要請に応じたといういきさつがこの状況の背景にある。JASM は日本の鍼灸研究の状況を伝えるために JSAM 関係者に学術的に水準の高いポスターを今回のシンポジウムのために作るよう依頼した。これらのポスターは一般の発表とは別

にJapan Special Poster Sessionと銘打たれ、統一されたデザインで綺麗に出力されて一堂に展示されたのは圧巻であった。基礎、臨床、疫学領域の研究が有機的に絡み合っている日本の鍼灸研究の現状がダイジェストされインパクトの強いものであった。

これに隠れて目立たなかったが、韓国の16の発表は基礎から臨床試験の方法論にいたるまでバランス良く、伝統と科学的方法論についても配慮されていた。金容奭 (KIM Yong-Suk)、李惠貞 (LEE Hye-Jung) が率いてきた慶熙 (Kyung Hee) 大学以外からも、韓国韓医学研究所 (Korea Institute of Oriental Medicine: KIOM) の若手研究者も加えて韓国勢の若手が参加し積極的に交流を行っていたのが印象的であった。これに対して、日本の大学勢には助手やfellowクラスの若手の姿が見えず、外に向けて積極的な韓国と、内向きの日本の姿勢の落差を感じた。

今回のシンポジウムを運営したAPAEは鍼灸を行っている医師を中心とした学会である。APAEはポルトガル厚生省に認可された唯一の鍼の学会であり、1973年に土屋と東洋医学を学ぶ医師のグループによって設立され、100人を超える会員がいるという。現在ポルトガルには鍼灸に関する法制度がなく、法律上定義された資格で鍼灸を行えるのは医師だけである。しかし、日本の免許を提出して日本人の鍼灸あん摩マッサージ指圧師が開業している状況がある。現在は曖昧な状況にあるが鍼灸の法制化が進行中であると聞いた。

また、APAEはポルトガル鍼灸・指圧・柔整・漢方連盟 (the Portuguese Federation of Acupuncture-Moxibustion, Shiatsu Therapy, Ju-Sei Therapy and Kampo: PFASJK) という組織を最近立ち上げている。日本式の東洋医学を柔道整復も含めて全て取り込んだ概念を異国の地で発展させようとしている。シンポジウムの運営を手伝っていた若手の日本人と話してみると、日本の柔整師の免許を持っていて日系の鍼灸柔整院で仕事をしているということであった。彼らの支援抜きでは運営は成り立たなかったようである。我々鍼灸師の立場からすると、柔道整復師会との共同開催には驚かされたが、案外、外から日本を見ている眼の方が

日本の特徴についてよく見えているのかもしれない。柔道整復師によるセッション (ワークショップ) も行われ、欧州からの参加者が熱心に見ていた。

講演で注目されたのは中国の中医学におけるEvidence-based Medicine (EBM) の受容状況である。WFAS名誉主席である中国の王雪苔 (WANG Xuetai) が「鍼の臨床研究の幾つかの点についての考察」と題する基調講演を行った。昨2004年11月のオーストラリアでのWFAS学術大会<sup>1)</sup>で「鍼灸医学の特色を論ず」と題した基調講演においてもEvidence-based Medicine (EBM) についても既に触れていたのに引き続き、今回の講演でも研究方法論を論じ、とくにコントロール群に何をおくべきかを論じていたのが印象的であった。Medical Acupuncture系の研究者の間で論じられていることとは若干視点の違いがあると思える部分もあったものの、中国の中医研究者にも次第に臨床試験の概念が浸透していると感じた。

昨2005年、中国コクランセンターの劉建平 (LIU Jianping) に、その質に問題があるとは言え中国の臨床試験は膨大な数があるという唐金陵 (TANG Jin Ling)<sup>2)</sup>らの報告の真偽について、尋ねたところ、実際にかんりの量があるだろうということであった。今後、鍼臨床試験の報告が竹のカーテンの向こうから大量に供給されることになりそうである。実際、最近の中国針灸 (Zhongguo Zhen Jiu) 誌にはランダム化比較試験 (randomized controlled trial: RCT) が多数掲載されている (ただし中国語)。その英文abstractから推察するところではその多くがpositive resultsであり、高い治癒率と異常に高い概括有効率を報告しているものが目につく。Vickersら<sup>3)</sup>の指摘する出版バイアスの存在は克服されていない可能性がある。また、品質管理や倫理に対する配慮についてはさらに情報が必要と考えられるが、最近中国の薬品製造にも品質管理が義務化されるなどの情勢の変化から見ると、鍼灸研究に関しても急速に変化する可能性があり、注目される場所である。

## 2. 第6期第2回執行理事会

執行理事会はシンポジウムが開催されたシエラ

トン・リスボア・ホテルにて第2日(11月5日)の15:00から開催された。日本からは所用で参加できなかったWFAS副会長・JSAM参与である黒須幸男の代理として国際部副部長内田輝和が、同じく所用で参加できなかったWFAS執行理事でJSAM国際部長の津谷喜一郎の代理として国際部部員の津嘉山洋がそれぞれ委任状を持って出席した。

事前に送られてきた議案は、1)鍼の標準化、2)ワーキンググループという単純なものであったが、当日配布された議案は(1)標準化委員会創設の提案、(2)専門家委員会創設の提案、(3)外交委員会創設の提案に関わる議題であった。

#### (1) 標準化委員会 (Standardization Committee) 創設

事務局の用意した提案書によると、WFASは1995年に青森で作成された「鍼の臨床研究ガイドライン」をまとめ、2003年からは「経穴位置の標準化」を開始し、これら標準の普及に重要な役割を果たしたということである。しかし、実際には何れもWHO西太平洋事務局 (Regional Office for the Western Pacific: WPRO、[http://www.wpro.who.int/health\\_topics/traditional\\_medicine/](http://www.wpro.who.int/health_topics/traditional_medicine/))の主導で進められたもので、日中韓3国以外の状況を把握していない執行理事にはあたかもWFASが音頭をとって標準化を推し進めているという誤解を生じる怖れがあった。これに対して、韓国の金容奭 (KIM Yong-Suk) が、「鍼の臨床研究ガイドライン」や現在進行中の経穴位置標準化をはじめとする標準化事業についてWHO/WPRO伝統医学担当官の働きかけに応じて日韓中を中心に専門家が集まり標準化を進めている実際の状況を説明した。

標準化委員会になすべき事業として以下のようなものが事務局から提案された。

- 1) 鍼の標準化システムの開発戦略を確立する。
- 2) 鍼の効果が期待できる疾患の研究、経穴の適応症の研究、鍼教材の国際的標準の研究を継続する。
- 3) 鍼の臨床研究方法を洗練し、“鍼の治療効果の評価システム”を立ち上げる。

- 4) 鍼の専門用語の標準、鍼教育の標準、鍼の団体の構造の標準、鍼灸師の標準、鍼器具の標準を成立させ、鍼の法制化をサポートする。
- 5) 鍼の標準の改訂計画を立て、鍼の普及と学術的交流を促す。

既存の教育委員会、立法委員会、学術委員会等との整合性や役割分担について明解ではないが、賛成多数で承認された。事務局の提案が総花的で明確な焦点が設定されていないのは鍼の標準化プロセスに対するWFASのリーダーシップを強調する目的があるためかもしれない。具体性を欠いた委員会は実質的に機能しないと考え、日本側は賛成の挙手を行わなかった。



写真2 . 執行理事会 (2005.11.5, Lisbon)

標準化委員会の計画として以下の提案があった。

- 1) 4年計画
  - ・鍼の標準化システムの開発戦略を確立する。
  - ・経穴位置標準化研究を行う。
  - ・危険部位における、安全な刺鍼のガイドラインに取り組む
- 2) その後の計画
  - ・鍼標準化の基礎作業
  - ・経穴の適応症の標準化の研究
  - ・鍼の効果を期待できる疾患の系統的分析

#### (2) 専門家委員会 (Specialist Committee) と外交委員会 (Foreign Affair Committee)

2004年の代議員会にて会を活性化するために顧問委員会を設立したばかりであるが、これが十分に機能していないという理由から、新たに専門

家委員会を設立するという提案があった。この委員会は臨床能力と科学的研究において有能な人材を集めWFASの活動を補佐するというものである。この提案は、各国の鍼に関する教育や制度に対して直接WFASが影響力を及ぼすための外交委員会をつくるという提案とともに承認された。専門委員会の構成員についてはWFASを構成している各学会、執行委員会、病院や研究組織などからの推薦を求めている。

標準化委員会の用意する種々の雛型を外交委員会がWHOを介さずにNGOとして直接各国に供給し組織/制度作りを支援するということらしい。インドネシアのように鍼灸師の制度が未整備の国の中医学系の組織には魅力的に映ったようである。他方で、中国でトレーニングを受けWFASの国際免許を持っているから各国の法システムと無関係に鍼灸を業とする資格があると主張する有資格鍼灸師が存在すると聞くが、鍼灸の健全な発展のためには各国固有の法システムを尊重する態度が必要だろう。

一方では、中医学という枠組みを推進する世界中医薬学会連合会 (World Federation of Chinese Medicine Societies: WFCMS, <http://www.wfcms.org/english/>) という組織があるが、鍼灸という枠組みのWFASとの関わりについての疑問もありすっきりとしない。WFASの委員会は実質的に機能していないものもあるようだ。中国政府の支援も受けられ、事務局の機能を強化するので今後その心配はないと中国執行部の説明があったが、どの程度機能するかの保証はなさそうである。さらに、中国の執行部は、WHOを介さずに直接各国政府とやり取りしたほうが早いし、WHOからのサポートが得られるという議論を行っていたようだが、その論理はよく理解できなかった。

### (3) 問題含みの理事会の運営

理事会の運営は執行理事の出席も取ったように見えず、用意していった委任状を提示する必要もなかった。出席した理事のリストもないとしたら一体議事録はどうやって作っているのかという疑問が湧いてくる。オブザーバーの参加もノーチェックであり拳手による投票の信頼性も問題であるが、

執行部の提案に同意しないという意志を表明するものはほとんどなく、賛成の拳手をしなかった我々2人は目立ってしかたがなかった。また顧問委員会の活動状況に関する報告に基づく「十分に機能していない」ことのエビデンスが示されぬままに新委員会の設立という重要議事が進行してゆくという、いささか異常に感じられる議事進行に対する異論は出ぬままに委員会は終了した。

最近まで中国では法律による統治という観念が希薄であったことから考えると、国際経験を積んだ若手の事務局員たちの世代が実権を握るまでWFASの運営は旧態依然とした中国式で行われ、中国以外の加盟国はこれに甘んじることになるようだ。このことは、延々と中国語で議論が続き、非中国語の構成員は蚊帳の外におかれることがしばしばであったという状況にも表現されている。鍼灸の起源は自分のものであると考えている中国側から見れば確かに、WFASは自国の制度や文化の延長であり、その他の参加国は従属的な立場と考えるのも自然なこともかもしれない。しかし、WFASの運営方法や学術レベルが疑問視されていることに気づいて欲しいものである。鍼灸は今や地球規模の文化の一つとあってよく、日本が柔道においてピンクの胴着使用を受け入れざるを得ないという事態を迎えたように、中国も鍼の多様性を受け入れざるを得ない日が近いかもしれない。

余談であるが、理事会の通訳は米国文学専攻の大学院生が行っていたが、発音も聞き取りやすく、北京の鍼灸トレーニングセンターの通訳をしているため専門用語にも通じていた。お披露目という感じで中国の事務局の若手が紹介されていたが、国際感覚をもった優秀な人材が存在しているというのならば、早々に世代交代が進展することを期待したい。

### 謝 辞

原稿を御校閲いただいたJSAM国際部部長の津谷喜一郎氏に感謝いたします。また写真は高澤直美氏から提供いただきました。

## 文 献

- 1) 東郷俊宏, 津嘉山洋, 津谷喜一郎, 黒須幸男 .  
ゴールドコーストでの第 6 回 WFA 世界学術  
大会報告 . 全日本鍼灸学会雑誌 2005; 55(1):  
86-96.
- 2) Tang JL, Zhan SY, Ernst E. Review of  
randomised controlled trials of traditional Chi-  
nese medicine. *BMJ* 1999; 319(7203): 160-1.
- 3) Vickers A, Goyal N, et. al. Do certain coun-  
tries produce only positive Results? A system-  
atic review of controlled trials; *Controlled  
Clinical Trials* 1998; 19: 159-66.

Foreign Introduction

International Conference Report

## Report of the WFAS International Symposium of Acupuncture 2005 at Lisbon: including report of Executive Committee

TSUKAYAMA Hiroshi, UCHIDA Terukazu

Department of International Affairs, the Japan Society of Acupuncture and Moxibustion (JSAM)

### Abstract

On 4-6 November, 2005, the WFAS (World Federation of Acupuncture-Moxibustion Societies) International Symposium of Acupuncture was held at the Sheraton Lisboa in Lisbon, Portugal. Associação Portuguesa de Acupunctura Eléctrica (APAE) organized the symposium with the theme "Acupuncture: New Ways for the 21st Century Medicine". Mitsuharu Tsuchiya who is Japanese and vice president of APAE served as a president of the symposium. Three hundred and twelve participants from 23 countries (Portugal: 86, Japan: 68, China: 35 and others) participated. In this symposium, Japan Society of Acupuncture and Moxibustion (JSAM) collaborated to have "Japan Special Poster Session" for the purpose of introducing Japanese acupuncture research to European countries.

In the afternoon of 5 November 2005, Executive Committee meeting was held. The Committee decided to create three new committees: Standardization Committee, Specialist Committee and Foreign Affair Committee. Advisory Committee, which was established just one year before, was replaced by Specialist Committee.

*Zen Nippon Shinkyu Gakkai Zasshi (Journal of the Japan Society of Acupuncture and Moxibustion: JJSAM).* 2006; 56(1): 90-95.

Key words: acupuncture, Lisbon, WFAS, executive committee, Japanese acupuncture